



少年ガバレ 力石総社



ハイカラなまちかど郷土館入口

大人の出番まではまだ時間がありそうだ。少し周辺を歩いてみよう。参道を出たところに総社市まちかど郷土館がある。明治43年建築の旧総社警察署を改装した資料館 六角

雪舟生誕の地、総社市にふさわしい催した。必死の表情が凛々しい。同時に写生大会も開催。雪舟生誕の地、総社市にふさわしい催した。

再び総社宮に戻る。観客も大分増えた。境内の回廊が絶好の見物席だ。そろそろ大人の時間帯。本部席で住所・氏名を登録すると紐のついた力札をくれる。後は目標の重さの石がある土俵に行つて順番を待つ。やや考え、十五貫(約60キ)の土俵に向う。米一俵が十五貫、昔から米一俵上げられれば一人前と言われたことを思い出す。無事クリアした。次の予定もあり、そろそろ総社宮をお暇しよう。帰つてニュースを参照したら、男子の部では岡村主将が初優勝していた。面目躍如だね。

力石総社に参加する
東総社駅から徒歩3分ほどの所に総社宮がある。大化年間(7世紀半ば)の創建と伝えられ、総社市の地名の起源でもある。
総社とは国司が赴任したとき、その国の全ての神社にお参りする慣わしがあったが、それを簡略化するために、国の神社を集約したお宮さんである。かなりの国でとられた行政コスト削減策だ。こゝ、備中の総社には304社が祀られている。
今回、総社宮を訪れた日は8月の第3日曜日、力石総社の神事の日であった。力石総社とは総社宮に伝わる力石を持ち上げ力を競う祭事だ。

似たような行事はスペインの少数民族・バスクでも行われている。
朝9時半、開会式が始まる。今年の競技は第13回目、競技について岡山大学ウェイトトレーニング部岡村主将から説明があった。その場で登録すれば誰でも参加できる。力石には紐がついていて、10秒間引き上げれば成功。バスクのように肩まで上げる必要はない。よし、参加して見ようか。予選は半貫(1・9キ)から二十六貫(97・5キ)まで16種。二十六貫の石を上げたら決勝戦に進めるというが、私にはちとやりすぎだろう。
9時45分、競技開始。4つの土俵で半貫から三貫まで、小さい子供の必死の表情が凛々しい。同時に写生大会も開催。雪舟生誕の地、総社市にふさわしい催した。

形の楼閣風入口がハイカラな雰囲気。入口前の丸型ポストがよく似合う。
一階には市内の歴史と土産が、二階には備中産物、阿曾の産物、イ草など伝統産業の道具類や資料が展示されている。備中が富山に次いだ売薬の根拠地であったとは意外であったが、特に興味を引いたのは鉄物だ。「まがねふく」を枕詞とし、古代製鉄の大産地であった吉備の伝統を継承した産物なのだろう。
入場無料。町歩きやサイクリングの途中で一呼吸おくにはもってこいの場所である。

吉備線沿線史跡紀行

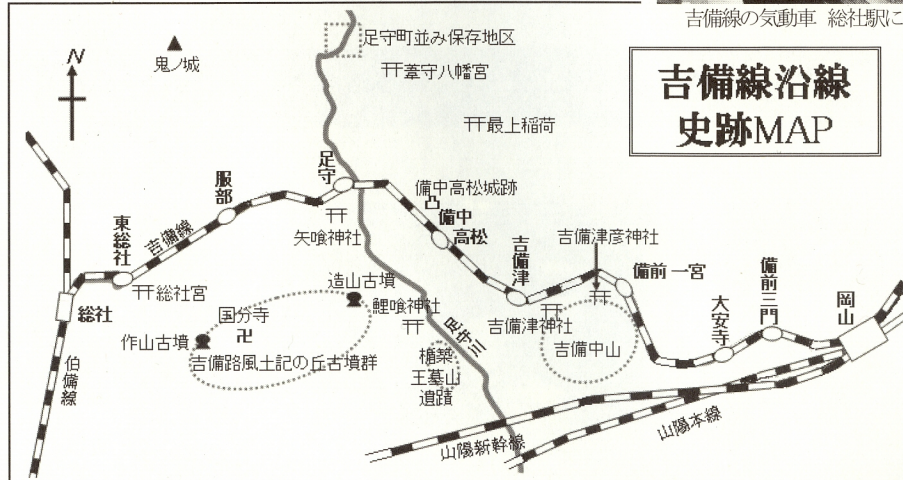
総社市域・備中高松城・吉備の中山

柳沢 道生



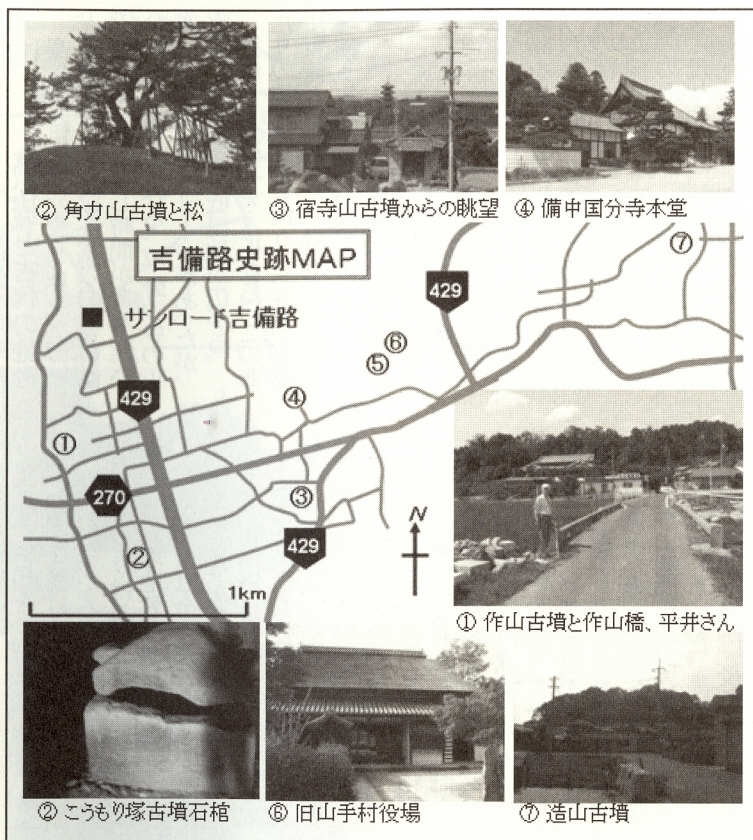
吉備線の気動車 総社駅にて

吉備線沿線史跡MAP



史跡の宝庫・吉備線沿線
岡山駅の北の端、17番線から13番線の気動車が発着している。JR西日本、吉備線の列車である。
吉備線は明治37年(1904)、高梁川の水運と岡山市を直結する目的で中国鉄道という私鉄路線として開業した。現在、岡山駅〜総社駅20.4キ間に12の駅がある。明治44年(1911)には最上(さいじょう)稲荷参拝客輸送のため、現備中高松駅(当時は稲荷駅)〜稲荷山駅間2.4キが開業したが、戦時中の昭和19年(1944)1月に軍事輸送に貢献しない不要不急路線として廃止された。
同年6月、吉備線自体も中国鉄道から国鉄により買収され、中国鉄道は鉄道部門を失い、バス会社・中鉄バスとして今日に至っている。

岡山駅を出て2駅目まで、吉備線の列車は岡山市街地を走る。3駅目の備前一宮から風景は一変し田園地帯に入る。同時にここからは、史跡各駅停車と言つても過言ではない路線になる。古代〜中世〜近世と時代は様々に、どの駅で降りても史跡の旅が楽しめる。下図を参照願いたい。本稿では東総社、備中高松、吉備津の3駅周辺の史跡を中心に、また別稿では陣屋町の残る足守を紹介したい。
吉備線には、電化して新しいコンセプトの路面電車、LRTを導入し市内電車・岡山電鉄に乗り入れる話題もある。路面電車での史跡めぐり、いいなあ。できたら体験してみたいものである。



墳とは気付かないだろう。全長360メートル、全国4位の前方後円墳、公開の古墳では最大規模だ。築造時期は5世紀前半と推定され、同

時期に構築されたと思われる伝履中天皇陵(全長365メートル)とほぼ等しい。六つの陪塚をあわせ、大正10年(1921)に国の史跡に指定さ

れている。(MAP⑦)

造山古墳は規模だけでなく形も伝履中陵とほぼ同じだという。しかし、畿内の古墳は伝心神社(455メートル)、伝仁徳陵(486メートル)と次第に規模が大きくなって行くのだが、吉備では作山古墳(263〜300メートル?)、以下200〜100メートル台の古墳と規模は縮小して行く。畿内政権と古代吉備勢力との力関係の変化の反映なのだろう。

「平井さんは学校の先生をされていたのですか?」帰りの車の中で私が聞くと、「いえ、外資系の石油会社に勤めていました。サラリーマンでした」と私の想定外のお答えだった。

「サンロード吉備の傍で育ったので、子供の頃は古墳で遊んでいたんですよ。やっぱり好きなんですわね」

郷土愛と『好きこそものの上手なれ』の相乗効果なのだろうか。具体的に解り易い、しかし検証できていないことは「二つの考え方ですが」と付け加える抑制のきいた語り口。

グステイネーションキャンペン期間中は、吉備路史跡を巡る乗合タクシーのサービスもあるそう。リピーターになりそうな予感がしてきた。

吉備路の史跡群を巡る

総社宮から車で数分、国民宿舎サンロード吉備路に着く。宿泊、食事、日狩り温泉入浴、物品販売、広い駐車場と吉備路観光の拠点。ここで吉備路ボランティア観光ガイド協会の平井さんと待ち合わせ。名刺を見ると平井さんは会長であった。

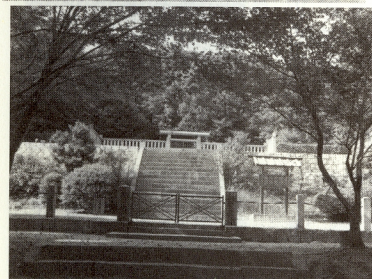
打合せの後、まず作山(つくりやま・さくさん)古墳へ。五世紀に造られた前方後円墳で全長263メートルは全国第9位の規模。ただし、幾つかの気になる点のある古墳だ。まず、未完の状態、築造が中止されたと思われること、また、前方部と後円部のバランスが変な。一般の前方後円墳の例で考えれば長さは300メートルあつてもおかしくないそう。下道氏の築造と伝えられるが、何があつたのだろう。築造時代の地勢を伺うと、当時は高梁川が東流しており周囲は湿地帯であつたとみられるそう。――「そういえば」と言つて田圃の中に残された石橋に案内してくれた。作山橋、明治初期の遺構。もとより高梁川ではないが、昔この田圃は河川であつた名残りだ。(MAP①)

五世紀頃の方墳で天辺の樹齢四百年の県内最大の黒松が見事だ。ここは旧山手村、大阪相模の力士を輩出したところだという。この古墳の傍らで相模の興行が行われたのが名の由来とか。それが氏神、御碕神社の奉納相模とは意味深長である。隣には移築・復元された横穴式のギリギリ山古墳がある。(MAP②) そこから東に約1kmで宿(しゆく)寺山古墳に至る。元は全長160メートルの前方後円墳であつたが、前方部は破壊され後円部のみ残る。備中国分寺のほぼ南にあたり後円部に登ると五重塔が展望できる。(MAP③) 北に進み県道270号線を越えると備中国分寺である。元来の国分寺は天平13年(741)に創建された。備中の国分寺は備前、備後、美作の国分寺と異なり、勅令で定められた様式に則っていない。何故だろう。現在の伽藍は江戸中期に再建されたもの。吉備路のシンボルと言つて良い高さ約34メートルの五重塔は、弘化元年(1844)頃に構築された。(MAP④) 国分寺の山門の前の道を東に。この道が旧山陽道のこと。やや行つて小路を北に曲がればそうもり塚古

墳に至る。六世紀後半の横穴式古墳かつては黒媛塚と称されていた。横穴には金属格子の扉があつた。平井さんが鍵を持っていて開けてくれた。玄室に入ると石棺があつた。かつては誰でも入れたが、石棺の端を削る人がいたため、扉を設けたそう。見ても減るもんじゃないがで通用しないとは情けない。(MAP⑤)

さらに東に進む。萱葺の古民家が二軒。一軒は旧山手村役場、幕末から明治初期の建築、明治35年(1902)から66年間役場として使用された。もう一軒は旧松井家住宅、山陽道に面した茶屋で江戸末期の築と推定される。その先には岡山県立吉備路郷土館があり縄文時代以来の出土品、歴史的資料が展示されている。特に、吉備にのみ出土し、後に円筒形埴輪に発展していったと推測される特殊器台土器や、須恵器を焼いた窯跡など興味深い展示が多い。また、国分尼寺跡もここからほど近くにある。(MAP⑥)

再び旧山陽道にもどり車で東に進む。今日の最後の目的地、造山(つくりやま・さくさん)古墳に行く。遠目で見れば丘陵だ。言われなければ古



中山茶臼山古墳
宮内庁管理で立入り禁止

古代この丘は海に面していたのか。吉備の中山との間が吉備の穴海だったのだろうか。中山との間の田圃をイメージで海に変えてみる。新幹線高架の手前の地名は川入だ。足守川がそのあたりで海に入っていた時代もあったのだろうか。

ようだ。また、吉備独特の特殊器台や製塩土器などの展示も見ものだ。

そこから、だらだらと坂を降りるやがて右に登る山道との分岐点。これを登れば中山茶臼山古墳、吉備津彦の陵に比定されている。近づく、宮内庁管理地と立入り禁止の看板が

したが、この旅では初めてのことで、
な気持ちで周囲を歩いた。
下りたところが吉備津神社の回
廊。工事中の拝殿にお参りし鳴釜
行われる鳴鑼饗宴を見に行く。鳴
地平にあったこと、吉備津神社
に広がる、池をめぐるせた宇賀
神社がとても気になった。改
めて訪問してみたい。

う。何気なく見ると「茶祖栄西(えいさい)生誕の地」の立て札。民家の庭先を断りながら入り、お参りする。さらに行けば湛井(たたい)十二ヶ郷用水の開発者、妹尾兼康(かねやす)の供養等があるではないか。この小さな二つに史跡は、私の旅の締めくくりを豊かなものにしてくれた。

貫の力石を上げた総社宮の関係者が、急に親しみが湧いてきた。

「水攻めといつても元々ここらは湿地帯だったので。実はあの裏山に小早川勢の鉄砲隊が陣取り、外に出る者を狙撃したらしい。清水側も畳を楯にして反撃したがうまくいかなかったようですね」

時に天正10年(1582)、3万の大軍を背景に、城を包囲した秀吉の調略を拒み、最後は城内の家来を救うため切腹した清水宗治。総社宮付近の清水村出身、代々総社宮に關係した家柄とのこと。私が前日、十五貫の力石を上げた総社宮の關係者が急に親しみが湧いてきた。

横田さんがお見えになる。このあたりの地形の話を伺うと、昔の高梁川東流と足守川との合流点で土砂が堆積したのがこの地だとのこと。またその時代の自然堤防の上に集落が出来、それがほぼ旧山陽道になっているそうだ。面白い。

高松城と古代の地形

高松城跡保興会云ホランテイアガイ
ドの横田さんと高松城跡公園資料館
で待合せ。まだ少し時間があるので、
公園を散策してみる。平野の中の小
高い土地というイメージがあつたが、
実際には、周囲は低湿地が広がる。
横田さんがお見えになる。このあ

実際の地形を見ながら説明を受けると、実感かわいてくる。「このあたりは金(カネ)の着いた地名が多く、その水は金気があつて良くなかつたようです。宗治は良い水の出る土地で育つたので我慢できなかったよう、山に井戸を掘りに行つた形跡がある。なるほど、水の話、備文化の発祥の地だとも通ずるところがある」

「総社あたりの山は高くて形が丸いんです。製塩も燃料として木材します。だから山に木土砂の流出が進んだの、そうか、疑問に思つた一つ解消しそうだ。何故無くなつたのか。後沿つた十二ヶ領用水のだから、わざわざ人はない。製鉄・製塩のため起因した土砂流出が、えれば良いのか。



あの山麓に小早川勢が… 横田さん

りに行った形跡があるんです」

なるほど、水の話、足守が古代吉備文化の発祥の地だったという話とも通ずるところがあるようだ。

「また、このあたりは条里制の田圃とそうでないところがかなりはつきり判るんです。もちろん条理制の田圃がより古いですが」

「総括あたりの山は高梁川流域に比べると形が丸いんです。古代の製鉄も製塩も燃料として木材を多量に消費します。だから山に木が無くなり、土砂の流出が進んだのだと思います」

そうか、疑問に思っていたことがまた一つ解消。――と。高梁川より流下

こゝろ書くとき肝心の高松城水攻めの話が無いようだが、それはしつかり聞いた上での話。むしろ、そのような、かつて地形の話聞いたうえで、軍記を紐解けば、個々の挿話のリアリテイ一層増すといえる。

横田さんに以前のお仕事をお伺いすると、「大阪で銀行員をしていました」とのこと。そうか、平井さんとも共通するが、人の話を受け売りしない、きちつと自分で裏付けを取り、相手に正確に伝える、それは優れたビジネスマンの資質なのかも知れない。